

植民地近代をめぐる不協和音：  
韓国の「九龍浦近代歴史館」の文化財登録と  
『韓国内の日本人村』の九龍浦史を中心に<sup>1)</sup>

金 賢貞

はじめに

本稿は、韓国の植民地期（1910～45）に日本人移住漁村が形成された「九龍浦<sup>リョンポ</sup>」という地域に所在する「九龍浦近代歴史館」の国家文化財としての登録を機に浮上した九龍浦の植民地近代の解釈と記述をめぐる問題について、文化財登録の審議を担当した専門家集団の観点と九龍浦近代歴史館が展示する九龍浦史との間の齟齬に焦点を当てて考察することに目的がある。

韓国では1988年4月に「地方自治法」が全部改正（法律第4004号）され、紆余曲折を経て1995年6月に「第1回全国同時地方選挙」（地方自治団体長・地方議会議員選挙）が実施された。いわゆる「地方化の時代」の幕開けである<sup>2)</sup>。これにより、中央から独立した地方行政や住民たちは地元の「個性と文化に対する関心」を一層高めつつ、自治能力の向上と持続可能な将来像を模索することが求められた<sup>3)</sup>。さらに、消費性産業として規制されてきた観光業は、観光インフラの整備と観光資源の開発を目論んで策定された「第1次観光開発基本計画（1992～2001）」を機に重要産業の1つに位置づけられ、重視されるようになる。その影響もあり、経済活性化を狙い地域特有の観光資源の発掘に乗り出すところが増え始めた。この潮流の中で地元の歴史や文化に照射する傾向が著しくなったことは言うまでもない。

本稿の事例地域である慶尚北道浦項市南区九龍浦(2020年8月現在総人口約7,700人)においても、それまで関心を集めることのなかった日本式建築物を市行政や住民らが保存・活用しようとする変化が現れた。興味深いのは、この流れの中で誕生した九龍浦近代歴史館が展示する地元九龍浦の「近代歴史」が、歴史館の建物の文化財登録との関わりにおいて修正を求められたことである。この問題の実態を明らかにすることが、本稿の目的の1つである。

既に冒頭で触れたように、20世紀前半の九龍浦には日本人移住漁村が作られ、それまで盛んではなかった漁業が発展し、生業・生活の環境は大きく変貌した<sup>4)</sup>。大日本帝国による植民地統治から朝鮮が独立(1945)した後、九龍浦には日本人の住家・店舗や、宗教施設、記念碑等が残された。中でも住家・店舗のような建物は韓国人に払い下げられ、再利用が図られた。2003年に行われた建築学的調査によると、これらの建物は、用途が変更されたり平面の拡張や室の個室化等の増改築はなされたものの、その保存状態は総じて非常に良好と評価された[朴重信他2005:97・100]。

漁港としての九龍浦は、1990年代前半までイワシ、サンマ、イカ、ズワイガニ等を主要魚種にして発展したものの、水産資源の激減や漁業人口の減少などにより次第に廃れていった。そして、この不況を乗り越えるべく、行政や住民らは生干しサンマ「クァメギ」のような水産加工品の製造・販売や観光業に活路を見出すようになる。そこで、九龍浦の観光資源として注目されたのが日本式建築物である[金賢貞2017:39~43]。その結果、市行政の主導で「九龍浦近代文化歴史通り」が造成され、その中核施設として「九龍浦近代歴史館」(写真1・2)が設置された。

九龍浦近代歴史館は、植民地期の九龍浦で日本人移住者の大半を占めた香川県出身者グループのリーダー格であった橋本善吉の住宅兼店舗として1923年に建てられた二階建ての木造建築物[清州大学校建築工学部留斎建築研究室編2003:52]を利用している。韓国人所有者が外部事業者に売却したのを市が2011年に買い入れ、復元修理し、2009年に「九龍浦日本人家屋



写真1 九龍浦近代歴史館の入り口（2014年3月1日筆者撮影）



写真2 九龍浦近代歴史館（2014年3月1日筆者撮影）

通り広報展示館」として造成した。以後、市は展示内容等をより充実させ、2012年に現在の九龍浦近代歴史館としてリニューアル・オープンした。

ここで注目すべきは、保存状態の良好なこの建物を市が2度に亘って韓国の文化財庁に文化財登録を申請したものの、まだ実現されていないことである。より正確に言えば、最初の申請で文化財登録が予告されたが、その判断が覆され「保留」となり、2回目の申請を受けて実施された現地調査と文化財登録の可否をめぐる審議でも再び「保留」になった。詳細は第2章で述べたいが、この一連の事態は国家システムとしての文化財保護制度が、文化財の所有に関わる人や集団による当該文化財の解釈と価値づけに介入する問題、本稿の事例に引き寄せて言うなら、九龍浦近代歴史館の近代歴史が文化財登録という国家の手続きによって結果的には否定された問題について注意を喚起している。本稿では以上の問題を検討した上で、九龍浦近代歴史館における近代歴史がいかに生まれたのか、その経緯と特徴的な内容を中心に考察する。さらに、その近代歴史の主役とも言い得る当時の日本人移住者、つまり引揚者たちにとって九龍浦近代歴史館の近代歴史は何を意味するのか、その特徴を導き出しながら論じてみたい。これが本稿のもう1つの目的である。

本稿の議論は、現代韓国における歴史記述の問題、即ち「中央のヘゲモニーに基づいて構築された歴史知識」[李勛相 2001: 70]や「歴史知識の標準化」によって国民国家の「統合の論理」を創り出そうとする作業が「危険なレベルを超えた」[同上、76]と指摘する韓国の歴史学者李勛相の議論の延長線上にある。李勛相によれば、韓国の地方史における「地方」は中央のヘゲモニーを強化する役目を果たすべく、「単一な声」に集約され、その周辺や境界に置かれた人々は常に存在していたにも拘らず、標準化された歴史知識の中で隠蔽されがちであった。しかし地域の歴史性を明らかにするためには、地域における人間生活の諸相を豊富かつ多面的に描き出す姿勢と共に、歴史の語りや記述の多声性に対し開かれた態度を取ることが求められる。

さらに本稿は、「文化財」「文化遺産」は文化政策的な概念・構想であり、ヒエラルキー的で権力に満ちた社会的関係に基づく交渉プロセスの結果であり、それ故に政治的な産物だと論じるタウシエクの主張〔タウシエク 2018: 109〕や、「権威化された遺産言説」(Authorized Heritage Discourse)を生み出し、文化財・文化遺産を鑑定・指定する専門家集団の決定的な影響力に着目するスミスの議論〔Smith 2006: 29～24〕とも軌を一にしている。

次の第1章ではまず、日本式建築物が植民地期を含む韓国の近代を展示する公共の場に生まれ変わりつつあり、その建物のほとんどが文化財に指定または登録されている現状について述べる。この作業によって、九龍浦近代歴史館の文化財登録の保留という事態の特異性を浮き彫りにしたい。

## 1. 韓国の近代を展示する公共施設の登場

韓国の登録文化財制度は、1876年の開港から朝鮮戦争期の1950年前後までの建築物・産業遺産・芸術品等の文化的所産に「近代文化遺産」という新しい名称と意味を与えた上で、そのうち特に文化財としての価値があると認められたものを「大韓民国近代文化遺産」と名づけ〔문화재청 2008<sup>5)</sup>: 1・7〕、ナショナルな文化財として保護・管理する仕組みである。1999年に文化財管理局から昇格した韓国の文化財庁は、文化財の保存よりも「活用」のほうに重きを置くようになっていくが、登録文化財制度もまさに活用を重視した文化財の資源化を積極的に推奨している〔金賢貞 2018〕。本稿が注目する日本式建築物の場合、「近代歴史館」「近代博物館」のように「近代」に焦点を当てた展示施設としての活用が目立つ。

韓国の文化体育観光部<sup>6)</sup>がまとめた『2017 全国文化基盤施設総覧』を見ると、「博物館」は全国に853か所ある。このうち施設名に「近代」が付されているのは「釜山近代歴史館」(所在地〔以下略〕:釜山広域市・運営形態〔以下略〕:公立)、「大邱近代歴史館」(大邱広域市・公立)、「群山近代歴史博物館」(全羅北道群山市・公立)、「韓国近代文学館」(仁川広域市・公立)、

「近現代デザイン博物館」(ソウル特別市・私立)、「仁川近代博物館」(仁川広域市・私立)、「韓国近現代史博物館」(京畿道坡州市・私立)、「楊口近現代史博物館」(江原道楊口郡・公立)の8か所である。このうち、釜山近代歴史館・大邱近代歴史館・群山近代歴史博物館・韓国近代文学館の4か所が日本式建築物か、それを模して新築された建物を利用している(表1)。

表2は、日本式建築物を活用して近代を展示する施設を、筆者の調べに基づいてまとめたものである<sup>7)</sup>。施設名に近代が付いているのは「木浦近代歴史館」「仁川開港場近代建築展示館」「九龍浦近代歴史館」「群山近代美術館」「群山近代建築館」「大田近現代史展示館」の6か所である。他に、「鬱陵歴史文化体験センター」「江景歴史館」のように施設名に近代は付されていないが、日本式建築物を活用して近代を展示する施設もある。

以上の表1・2から、本稿の目的に照らし合わせて注目すべき点を3つ挙げてみたい。

第一に、植民地期を含む「近代」に照射する展示施設が2000年代以降登

表1 『2017 全国文化基盤施設総覧』における「近代」の展示施設

(日本式建築物と関係あるもののみ)

名称	開館年月日	運営形態	建物(建築年度、文化財の指定・登録番号、文化財の指定・登録年月日)
釜山近代歴史館	2003.07.03	公立	「旧東洋拓殖株式会社釜山支店」 <sup>※1</sup> (1920年代、市道記念物第49号、2001.05.16)
大邱近代歴史館	2011.01.24	公立	「韓国産業銀行大邱支店」 (1932年、市道有形文化財第49号、2003.04.30) ※元々は〈朝鮮殖産銀行大邱支店〉
群山近代歴史博物館	2011.09.30	公立	日本統治時代である1930年代の建物をイメージして建てられた新築の建物
韓国近代文学館	2013.09.27	公立	詳細不明(但し、日本統治時代に作られた倉庫)
仁川開港博物館 <sup>※2</sup>	2010.10.02	公立	「旧仁川日本第一銀行支店」 (1899年、市道有形文化財第7号、1982.03.02)

※1 カギカッコは、文化財に指定・登録された正式名称を指す(表2も同じ)。

※2 施設名に近代は含まれていないが、展示内容は朝鮮の「開港」を中心とした近代に絞られている。



場していることである。最も早いのは釜山近代歴史館（表1）であり、最も遅いのが大田近現代史展示館（表2）である。

第二に、展示施設の建物として日本式建築物（やそれを模した新築物）が使われており、その大半が文化財に指定もしくは登録されている。登録文化財制度は、韓国の文化財保護法（1962）の一部改正（2001）によって新設された。しかし表1・2を見ると、木浦近代歴史館1館（1981年・史蹟）、仁川開港博物館（1982年・市道有形文化財）、木浦近代歴史館2館（1999年・

表2 『2017 全国文化基盤施設総覧』に未記載の「近代」の展示施設  
（日本式建築物と関係あるもののみ・筆者の調べによる）

名称	開館年月日	運営形態	建物（建築年度、文化財指定・登録番号、文化財の指定・登録年月日）
木浦近代歴史館 ※ 2014年2月から1館・2館の2館構成	2006.08.15	公立	「旧東洋拓殖株式会社木浦支店」[2館] (1920年頃、市道記念物第174号、1999.11.20) 「旧木浦日本領事館」[1館] (1900年、史蹟第289号、1981.09.25)
仁川開港場 近代建築展示館	2006.09.27	公立	「旧仁川日本第十八銀行支店」 (1890年、市道有形文化財第50号、2002.12.23)
九龍浦近代歴史館 ※最初の名称は「九龍浦日本人家屋通り広報展示館」	2009.06 ※日は不明 2012.07.31 リニューアルオープン	公立	橋本善吉住宅兼店舗 (1923年)
群山近代美術館	2013.06.28	公立	「旧日本第十八銀行群山支店」 (1907年、登録文化財第372号、2008.02.28)
群山近代建築館	2013.06.28	個人所有・ 群山市管理	「旧朝鮮銀行群山支店」 (1922年、登録文化財第374号、2008.07.03)
大田近現代史 展示館	2013.10.01	公立	「大田忠清南道庁旧本館」 (1932年、登録文化財第18号、2002.05.31)
鬱陵歴史文化 体験センター	2011.07.28	文化財庁所有・文化遺産 国民信託管理	「鬱陵道洞裡日本式家屋」 (1910年代、登録文化財第235号、2006.03.02)
江景歴史館	2012.09.04	公立	「旧韓一銀行江景支店」 (1913年、登録文化財第324号、2007.04.30)

市道記念物)、釜山近代歴史館(2001年・市道記念物)、大邱近代歴史館(2003年・市道有形文化財)の建物(全て日本式建築物)は登録文化財ではなく、史蹟等の指定文化財である。つまり、登録文化財制度の前から一部の日本式建築物は文化財として制度的に保護されていた。しかし、日本式建築物が近代の展示施設に生まれ変わる時期が登録文化財制度の後という点は、特筆に値する。この点についてはもう少し補足したい。

1981年と1999年に文化財に指定された「旧木浦日本領事館」(木浦近代歴史館1館)と「旧東洋拓殖株式会社木浦支店」(同2館)は、前者が2009年まで同建物を利用してきた「木浦文化院」の移転、後者も当該建物を使用してきた「木浦海域防衛司令部」の移転によってその新たな用途が模索された。議論の末、地元の近代史を展示する施設を作ることが決まった。この決定に影響したのは、登録文化財の登録基準の1つである「近代史において記念になったり象徴的な価値の大きいもの」(文化観光部令第53号第35条の2)に示されている考え方、即ち、近代の文化遺産は「近代史」を「記念」「象徴」するものでなければならないという文化財行政の認識である。

第三は、本稿の検討対象である九龍浦近代歴史館の建物が文化財として保護されていない点である(表2)。当該建物を除けば、近代を展示する公共施設として活用されている日本式建築物のうち、文化財に指定または登録されていないのは、新築のもの(群山近代歴史博物館)か、建築年度等の詳細が定かでない建物(韓国近代文学館)のみである(表1・2)。

ではなぜ、九龍浦近代歴史館の建物は韓国の文化財に認定されていないのか、次章で検討する。

## 2. 「感じられない過去」と覆された文化財登録

### (1) 2008年3月と2009年2月の現地調査結果の相違

2007年12月17日、浦項市は橋本善吉の住宅兼店舗(九龍浦近代歴史館の建物)を「243番地チェ・ウヨン家屋」(以下「243番地家屋」という名



称で文化財登録を申請した。申請を受けた文化財庁は2008年3月11日に文化財委員キム・ヨンテ（専門は近代建築史）、同パク・ヒヨンス（民衆生活史）及び文化財専門委員<sup>8)</sup> チェ・ピョンハ（建築物の保存修理）の3名を現地に派遣し、現地調査を実施した<sup>9)</sup>。3人による調査報告書を基に同年7月30日に開かれた「文化財委員会近代文化財分科」（以下「文化財委員会」）の第5次会議にて当該建物を含む10棟の日本式建築物の文化財登録の可否をめぐる審議が行われた。その結果、原案可決、つまり、文化財登録を予告することが決まった<sup>10)</sup>。この決定につながった文化財委員会の意見は、次のようにまとめられた。

（九龍浦は）1910年代以降日本人漁師たちの集団移住村として形成され、（243番地家屋の位置する通りは）多数の日式住宅及び店舗が密集・定着した通りであり、近代文化遺産として歴史的保存の価値が高い。今後、通りと建物を一緒にして近代街並み文化財として登録する必要があると判断される。〔文化財庁近代文化財分科2008: 606〕<sup>11)</sup>

つまり、2008年第5次文化財委員会会議は、243番地家屋の位置する通りを中心とした九龍浦<sup>12)</sup> という町を「日本人漁師たちの集団移住村」であったと位置づけた上で、当時日本人によって建てられ、今も残っている日本式住宅や店舗の集中する通りを「近代文化遺産として歴史的保存の価値が高い」と評価した。243番地家屋についても同様の肯定的な評価が与えられた。では、上記の結論につながった各文化財委員の意見をもう少し詳しく見てみよう。

文化財委員キム・ヨンテと同パク・ヒヨンスは、2人とも「1910年代以降日本人漁師たちの集団移住村として形成され、多数の日式住宅店舗の密集・定着した九龍浦5、6里一帯の通りは近代文化遺産として歴史的保存の価値が高く、多数の日式建物群もまた近代文化財としての価値が十分あると認められる。したがって、通り（当時海岸線沿いに作られたメイン・ストリー

ト)と建物を一緒に近代街並み文化財として登録する必要がある」(括弧は原文のまま)と述べた。要するに、「日本人漁師たちの集団移住村」という九龍浦の特殊性を理解すると共に、その「近代文化遺産」としての価値や、現存する多数の日本式住宅・店舗の建物についても「近代文化財としての価値」は「十分ある」と認めたのである。

その上で、243番地家屋についても「比較的規模の大きい二階建ての建物であり、独立玄関と屋根及び外観が立派であるため、文化財的価値が良好である。(但し)老朽化の程度が著しいため、至急補修が求められると共に、増築されたブロック造りの建物は撤去する必要がある」と、補修の必要はあるものの、その「文化財的価値」を高く評価した〔文化財庁近代文化財分科2008: 608・609〕。

また、文化財専門委員のチェ・ビョンハによると、243番地家屋は「現在残っている旧九龍浦商店街の単一建物の中で最も規模が大きく、‘一’字型の平面形態であり、中央にポーチ」のある建築様式上の特徴を有し、現状は「(建物の2階の) 畳と扉の一部が失われただけで、原形をよく保っている」。さらに、この建物は「日本建築の装飾性と技法をうまく表している木造建築として評価できる」とした。その上で、「登録(指定)などの価値に対する意見」(括弧は原文のまま)については「旧九龍浦の日本人商店街に面した建物の中で規模が最も大きい日本の木造建築として建築の構造的意匠的特徴がそのままよく表れているため、登録文化財としての価値は十分ある」と結論づけている〔(本段落の引用)文化財庁近代文化財分科2008: 609〕。

以上の3人の意見は、次のようにまとめられる。「日本人漁師たちの集団移住村」であった九龍浦には「多数の日式住宅店舗」が残っている。そのうち一番「規模」が「大」きく「独立玄関」を有し「屋根及び外観が立派」で「原形をよく保っている」243番地家屋は「日本建築の装飾性と技法をうまく表している木造建築」「日本の木造建築として建築の構造的意匠的特徴がそのままよく表れている」建物であり、「登録文化財としての価値は十分ある」。

しかし、2008年8月11日から同年9月9日までの文化財登録期間を経た後、2回目の現地調査が決定され<sup>13)</sup>、2009年2月4日に文化財委員会近代文化財分科委員長1名と文化財委員2名によって実施された。その結果、243番地家屋を含む「九龍浦日式家屋」5棟は、次の理由で文化財登録が見送られた〔文化財庁近代文化財課 2009: 5337〕。

- ・登録予告された5棟の建物は保存状態が極めて劣悪である。特に1階部分はほとんど改造された状態である。外皮を取り除き、文化財としての価値を有するためには元の状態に還元させ（建築材料・建築施行の側面で）、建築物全体を再確認する必要がある。
- ・5棟を含む通り（街並み）の景観の変化がひどく、過去が感じられる状態ではない。歩道、仮設物などが建築物の景観を阻害している。
- ・歴史的、街並み景観の側面から建築物全体を見た場合、登録文化財としてはまだ不十分であると判断される。〔文化財庁近代文化財分科 2009: 5338、括弧は原文のまま〕

2009年2月4日の現地調査は、2008年3月11日の現地調査の結果を覆す内容となった。最初の現地調査に基づいて「近代文化遺産として歴史的保存の価値が高い」と評価された九龍浦の通りは、2回目の現地調査によって「景観の変化がひどく、過去が感じられる状態ではない」と見なされた。さらに、最初の現地調査では「日本建築の装飾性と技法をうまく表している木造建築」「日本の木造建築として建築の構造的意匠の特徴がそのままよく表れて」おり、その「原形」もよく保たれていると評価された243番地家屋は、2回目の現地調査において「保存状態が極めて劣悪」であるため、復元させてから「再確認」しなければならないと鑑定された。最初に現地調査した文化財委員たちには十分感じられた過去が、2回目の現地調査者たちには感じられない過去になった。

## (2) 2013年9月の現地調査：求められる「歴史」

なぜ、文化財としての評価が逆転したのであろうか。最初の評価から1年も経たないうちに覆された決定の不可解さは、243番地家屋と同じく1923年に建てられた「旧朝鮮銀行群山支店」<sup>14)</sup>(写真3)に対する文化財委員会の評価に比べてみると一段と増す。

2007年12月6日に開催された第6次文化財委員会会議では、全羅北道群山市に位置する旧朝鮮銀行群山支店の文化財登録が審議された<sup>15)</sup>。その結果、同建物の文化財登録が予告され、予定通り確定した。旧朝鮮銀行群山支店の文化財登録の根拠になった現地調査は、2007年11月15日に文化財委員パク・ヒョンス(民衆生活史)、同ソ・ジュンソク(現代史)、同ソン・ソクギ(近代建築史)の3名によって行われた。

同建物は、終戦後「韓国銀行」「韓一銀行」の群山支店の建物に使用された後、1983年に個人に売却され、その後はクラブなどの「遊興施設として



写真3 旧朝鮮銀行群山支店・群山近代歴史館(2018年2月15日筆者撮影)

使用」された〔文化財庁近代文化財分科 2007: 1049・1051〕。さらに、「1991年頃の火事によって内部が消失」され、現地調査が行われるまで「放置」されていた〔同上〕<sup>16)</sup>。比較的詳細に調査内容を報告したソ・ジュンソクによると、「1983年に個人に（建物の）所有権が売り渡された後、数回の用途変更と増築、付け足す形で行われた改築の過程を経た」同建物は、「全体の外郭はだいたい多く残っている」ものの、「付け足して建てた建造物によって屋外で表側の建物の全貌を見ることは困難であり、屋内1階は遊興業所に用途変更した後、たくさんの変動があり、一部の柱壁にも損傷が見られ」、「2階の場合もたくさんの変動があった」〔同上、1049〕。屋内外の「たくさんの変動」、即ち、度重なる増改築が繰り返された挙句、「火事によって内部が消失」した旧朝鮮銀行群山支店の建物は、報告書の記述だけを見ても、243番地家屋より建築物の保存状態が良好とは言えないだろう。しかし、当該建物は文化財登録の予告後に文化財に登録された。その理由は、243番地家屋を含む九龍浦日式家屋について検討した文化財委員会の会議録では見当たらなかった次のような意味づけと解釈が文化財委員らによってなされていたからだと考えられる。

旧朝鮮銀行群山支店の建物に対し「たくさんの変動」を指摘したソ・ジュンソクは続けて「しかし群山市庁が明らかにしている通り、外郭に付け足した建物は全部剥がし取り、毀損された部分を復元、補修すれば全外郭の原形はそのまま生き返ってくるだろう。大きな建物であるため、屋内はいずれにしても展示場や博物館などとしてしか使えないと思われるため、変形が激しくても現在残っているところをよく生かし、一部を復元すれば大きな問題にはならないと考えられる」と述べた〔文化財庁近代文化財分科 2007: 1049〕。また、ソン・ソクギも「火災によって内部が消失した後に放置され、屋根及び内部が老朽化した状態」ではあるものの、「旧朝鮮銀行群山支店は日帝強占期に日帝の植民地支配のための代表的な金融施設として1923年に建立され、日帝強占期の群山を背景にした蔡萬植の‘濁流’<sup>17)</sup>にも登場したりする群山及びこの地域の近代史を示す象徴的な建物として文化財的価値は極め

て高い」と評価した[同上、1051]。さらに、パク・ヒヨンスも「衰退した状態ではあるが、十分復元して保存することができるだろう」「1923年のこの建物は全ての建物と同じように繰り返し手が加えられてきた。ここで我々が保存すべき部分は何か。時間的に見ると植民地時代の部分である。建築後22年間の歴史を蓄積した部分に限って保存し、1945年以後に加えられた部分は取り除くしかないだろう」という考えを示した[同上、1048]。

要するに、旧朝鮮銀行群山支店の文化財登録を判断した文化財委員3名によると、当該建物は「繰り返し手が加えられてきた」ので「変形が激しい。しかし、このような増改築やそれに伴う変形は、過去に建てられた日本式建築物「全ての建物と同じ」くあり得ることである。そのため、増改築による変形は「現在残っているところをよく生かし、一部を復元すれば大きな問題にはならない」のである。このような柔軟かつ前向きな評価に比べると、「もとの状態に還元」してから「再確認」しなければならないと結論づけられた243番地家屋に対する判断は相対的に厳しいと言わざるを得ず、両評価の間には腑に落ちない齟齬が存する。

では、評価のズレはなぜ生じたのだろうか。その手がかりとして注目すべきは、旧朝鮮銀行群山支店の報告書に書かれた「日帝強占期」「日帝の植民地支配」「近代史を示す象徴」「植民地時代」という表現であろう。

ナショナルな文化財(大韓民国近代文化遺産)を生み出し、権威づける専門家によると、国家の文化財行政が「保存すべき部分」は、日本式建築物における「植民地時代」「日帝強占期」に「限」られた部分、具体的には「日帝の植民地支配」という「近代史」を「象徴」する部分である。上述した報告書の内容に基づいて言えば、登録文化財制度における「近代」とは「日帝」に「支配」された時代を示し、このような近代を象徴しているか否かが、日本式建築物の文化財登録の判断における主軸になるのである。

243番地家屋を買い入れた浦項市は、2013年8月13日に「浦項九龍浦日式家屋」という新しい名前を付けて同建物の文化財登録を再申請した[文化財庁近代文化財分科2013:171]。これを受けて同年9月13日に文化財委員



A（建築史）、文化財専門委員 B（近代建築）、文化財専門委員 C（建築計画）の 3 人による 3 回目の現地調査が行われた<sup>18)</sup>。2008 年 3 月と 2009 年 2 月の現地調査に基づく調査報告書に比べ、2013 年 9 月の調査報告書の内容はかなり詳細に記されている。

同調査報告書によると、市の「近代文化歴史通り観光資源化事業」によって浦項九龍浦日式家屋は復元補修の工事がなされ、「良好な状態」になっており、文化財「登録の価値が高い」と評価された〔文化財庁近代文化財分科 2013: 173・175〕。しかし、2 度目の申請も 2013 年 10 月 15 日の文化財委員会第 5 次会议で保留となった。その理由を、文化財委員らは次のように述べた。

（同建物を活用した九龍浦近代歴史館は）日帝強占期の九龍浦の歴史文化の保存と再現に焦点を当てている。（中略）観光地として造成されたここ（九龍浦近代歴史館）が日本人には思い出になるかも知れないが、韓国人には心の痛む空間であるため、日帝強占期の収奪の歴史も一緒に示し得る展示内容と広報が必要である。〔文化財庁近代文化財分科 2013: 174。文化財委員 A〕

現在「九龍浦近代歴史館」の展示方法と展示内容の場合、文化財的価値を表しにくい状態である。従って、文化財登録を進める場合、登録文化財としての価値を考慮して「九龍浦近代歴史館」の展示内容を一部修正・補完する必要があると考える。〔同上、175 頁。文化財委員 B〕

本住宅の元建築主であった橋本善吉が九龍浦を基点にして鮮魚運搬業によって大成功し、当時最高の富をここで築いた人であり、日帝強占期の侵奪の歴史を最もよく表している証拠として（日帝強占期を肯定する人々に対し）反証できる。（中略）展示資料の相当部分を“なぜ日本人通りがここに形成されたのか? ”、“日帝強占期中、漁業資源の侵奪がどれぐらい

あったのか?”など日帝強占期の漁業資源の<sup>マ</sup>侵<sup>マ</sup>奪<sup>マ</sup>の歴史を、展示・広報及び活用の面で補完することを前提条件に文化財に登録することが望ましい。[同上、177・178頁、文化財委員C]

2013年第5次文化財委員会会議に出席した8名の文化財委員全員は、現地調査者の3名による以上の意見に同意し、文化財登録の保留を決めた。この決定の意味は次のように言い換えられよう。

橋本善吉のような日本人が移り住んだ九龍浦は「韓国人には心の痛む空間」である。橋本善吉が建てた建物を「九龍浦の歴史文化の保存と再現」のための展示施設に活用するのであれば、日帝強占期の「収奪」「侵奪」の「歴史」を展示しなければならない。これが当時の文化財委員全員の解釈・評価であった。さらに、この段階で明記された九龍浦の特定の過去、即ち、日帝強占期の収奪・侵奪の歴史が、2009年第1次文化財委員会会議で指摘された<sup>マ</sup>感<sup>マ</sup>じ<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>れ<sup>マ</sup>ない<sup>マ</sup>過<sup>マ</sup>去<sup>マ</sup>であったことは明らかである。

次章では、上に引用した文化財委員Bの認識、つまり「文化財的価値を表しにくい」と捉えられた九龍浦近代歴史館の展示内容について探ってみたい。

### 3. 「文化財的価値を表しにくい」九龍浦近代歴史館の展示

九龍浦近代歴史館(以下「歴史館」)は、1・2階全てを展示スペースに使っている。1階には「客室」「部屋」「奥の間」と名づけられた3つの展示室が並び、2階には「橋本家の娘たちの部屋」「書斎」という名の付いた2つの展示室が設けられている<sup>19)</sup>。

客室には「九龍浦の伝説」と名づけられたパネルと紹介映像、部屋には「九龍浦エル・ドラード」と題されたパネルや、浦項市(1929年制作)と九龍浦(1930年制作)の市街図、1930年代の九龍浦港周辺の市街地の縮小模型の他に、バリカンや火熨斗など、当時を偲ばせる生活道具の他に「新世界

への航海」(約5分、韓・日・英語)と題された映像機器が設置されている。奥の間には押入れや仏壇のある畳部屋に着物姿の2人の男女が炬燵を囲んで座っており、その周りには茶器やレトロな鉄製扇風機などが置かれている。

橋本家の娘たちの部屋には日本の伝統衣装の着物が飾られており、その前には琴とランドセルに囲まれた娘が一人座っている。その周辺にもレトロな電話機や日本人形等が置いてある。掛け軸や日本刀の飾られた畳部屋の続きにある書斎には「橋本邸の物語」と題したパネルや、「九龍浦会名簿」、元九龍浦尋常高等小学校長であった石丸正美からの手紙等がガラス張りのケースの中に入れられ、展示されている。また、ここでも「第二の故郷九龍浦」(約6分、韓・日・英語)と題された展示映像が見られる。

上述した展示室の名称や数々の展示品、さらに展示パネルと映像のタイトルから、歴史館における「近代歴史」の展示は、建築主の橋本善吉という日本人移住者の視点に立っていることが推察される。即ち、九龍浦という「エル・ドラード」「新世界」に「航海」して移り住んだ日本人移住者とその子孫にとって「第二の故郷」になった九龍浦という物語である。これは展示映像の中に分かりやすく描かれている。

まず、「新世界への航海」<sup>20)</sup>という映像を再生すると、九龍浦の町並みが日本式建築物群を中心に映り出されながら“浦項市九龍浦邑の海辺の村。この小さな村には異国情緒溢れる昔の家屋が現代の家屋と共に並んでいた”というナレーションが流れる。シーンは変わり、“ここで九龍浦の町に似た建物をあちこちで見ることができた”というナレーションと共に「讃岐市日本志度町香川県」の風景が映る。続いて“ならば日本人たちは九龍浦の町をどう思うのか”というナレーションの後、日本人の若い男性2人組・女子生徒4人組・若い女性2人組に九龍浦の町の写真を見せながら「ここはどこみたいだと思いますか?」と聞くシーンに移る。この質問に対し「京都?」「京都みたいです」「京都、京都みたいです」と答えるシーンがクローズアップされ、「日本人までもが日本の伝統家屋と思う九龍浦の町」というナレーションが挿入される。

次のシーンでは、香川県さぬき市小田にある「小田漁業組合」を訪ねた取材陣が「小田漁業組合代表取締役」という「松岡」(敬称略、以下同)にインタビューする。松岡は『志度町史』を見せながら、日本人漁師たちの「韓国進出」について説明する。さらに、“資料の内容を直接確認するために航海出漁者功労碑<sup>21)</sup>を訪ね”る。そこでは碑文がクローズアップされながら、“小田地域の漁師たちが九龍浦に進出した事実が刻まれていた”とナレーションされる。

シーンは「広島」に変わる。“日本の漁師たちが九龍浦に進出した理由を知るため松岡氏の紹介で昔九龍浦に居住した石原英雄さんを訪ねた”のである。“石原さんに聞いた昔の瀬戸内海の状況はとても厳しかった”というナレーションの後、現在「九龍浦会会長」<sup>22)</sup>である石原が“みな仕事を求めて行っとするはずよ、漁業する人は。小田の海というのはそんなに魚も獲れへんし”と語る。さらに、小田を中心とした日本と、九龍浦を中心とした韓国の両方を写した地図が映り、“力のない貧しい漁師たちが魚を獲るためには新しい漁場を求めて遠い海に出るしかなかった”、“命をかけて遠い海を渡った貧しい日本漁師たちにとって九龍浦は黄金のエル・ドラードだった”というナレーションが続く。

また、山のように積まれた魚や「鮮海漁業株式会社ヘイリョウ丸」等の写真が映り、“その当時不完全な船と網でも想像を超えるほど多くの魚が獲れた”、“網を捨てなければ船が沈みかねない時もあり逆に漁師たちは困ったという”、“このように九龍浦の豊かな資源は小田漁村の漁師たちが夢見てきた新天地となった”と語られた後、次のナレーションが流れ、この映像は終わる。

“黄金郷を求め、命をかけて遠い海を渡ってきた漁村の貧しい漁師たち。彼らが九龍浦に残した家屋は理想郷を夢見た日本漁師たちの過去の暮らしと現在をつなぐ近代歴史の一里塚となった。100年あまりが過ぎた今、九龍浦には相変わらず彼らの夢が残っている。”

要するに、展示映像「新世界への航海」は、九龍浦を「力のない貧しい（日本人）漁師たち」が「命をかけて遠い海を渡っ」てきて見つけた「黄金のエル・ドラード」「新天地」「黄金郷」「理想郷」であったと位置づけると共に、九龍浦の「異国情緒溢れる昔の家屋」は「理想郷を夢見た日本漁師たちの過去の暮らし」を伝える「近代歴史」の象徴であると捉えられている。興味深いのは、この近代歴史の事実性を証明しようとしているところである。九龍浦の日本式建物や町並みの写真をわざわざ日本人に見せて、それらが「日本人までもが日本の伝統家屋と思う」くらいリアルであることを強調したり、日本語で書かれた文献や石碑の碑文をクローズアップして九龍浦の近代歴史が「事実」であると強調している。

ただ気になるのは、この九龍浦の近代歴史に韓国人は登場していないことである。が、2階の展示映像「第二の故郷九竜浦」には1名の韓国人が登場する。

この映像は、今の九龍浦沖や漁船などを中心に九龍浦の風景を映すシーンから始まる。続いて登場するのは「九龍浦住民」の「ソ・サンホ」である。この映像の最初の話者であり、唯一の韓国人でもあるソ・サンホは「（九龍浦は）寒流と暖流がぶつかる所で、魚がたくさん捕れます。あの当時は、水半分・魚半分と言われるほど、魚が多かったです」「当時、九龍浦にはないものがなかったです。すべてがありました。劇場、ビリヤード場、病院は二つもあって」と語る<sup>23)</sup>。さらに、映像は「九龍浦神社」「平松湯（銭湯）と歯科医院」「ヒガシユ美容室」「九龍浦造船所」の写真を次々と映しながら“長年夢見てきた生活をする日本人たちにとって九龍浦は新しい故郷だった”というナレーションが挿入される。

しかし、「日本敗戦発表（1945年8月）」（括弧は原文のまま）という字幕と共に、原爆投下による原子雲や日本軍が米軍の前で敗戦を認めるシーンに変わり、雰囲気は一変する。ナレーションは“1945年8月、日本漁師たちの夢が粉々に砕け散るニュースが届いた。日本の敗戦だ”と語る。そして、

「新世界への航海」にも登場した石原が再び現れ、“もう外に出たらだめだぞ”といって、家の中にじっとしとった”と語る。続けて、九龍浦会会員という「橋本ヒサヨ」が登場し、“終戦になったのは嬉しかったのね、戦争が終わってね。もうやれやれという気持ちでね。だけどこちら帰ってくる時にはなんかさみしい気持ちでしたね。やっぱり生まれ育ったとこだからね。ずっとおりたいなって。友達とかとも別れてね”と語る。この2人に続けて再びソ・サンホが登場し、「一ヶ月ぐらいで、みんな帰りました。9月末頃には、全部いなくなっていました」と語る。

“敗戦の知らせを聞いた日本人たちはみな九龍浦港に集まり、昼夜分かつ日本へと向かった”というナレーションは、ほのぼのとするBGMと九龍浦会の集合写真等を背景に“九龍浦を<sup>はな</sup>て<sup>り</sup>日本全国に散っていったが、生まれ育った九龍浦に対する<sup>な</sup>が<sup>さ</sup>を消すことはできなかった”というナレーションにつながる。

さらに、“1978年2月、九龍浦会が結成された。別れた隣人や友人に会った人々は昔を回想しながら涙を流した”というナレーションの後、九龍浦会会員の「松本ヤスタダ」という男性が妻らしき女性と一緒に登場し、「毎年、会うと、若い頃の話をして、九龍浦にいた時の話をします。毎年です」と大きく笑いながら語る。

その後、再びソ・サンホが登場し、「日本のことを思うと、(昔の友達に)一度でも<sup>あ</sup>い<sup>そ</sup>う<sup>な</sup>ら、って思いますね」(括弧は原文のまま)と語る。続いて、次の3人の語りが連続して流される。

「この前、九龍浦<sup>マウ</sup>に行った時、ふと、ここが<sup>な</sup>が<sup>さ</sup>なんだと思ったら、涙が出ました。若い頃遊んだ所だから。」(石原)

「<sup>な</sup>が<sup>さ</sup>しいですね。学校が終わると、かばんを投げ出して、海と港に友達と遊びに行きました。」(橋本)



「懐かしいのが当たり前です。ここに帰って来たということは関係ありません。まだ九龍浦に帰りたいんですね。」(松本)

最後は“瀬戸内海の貧しい漁師たちが夢見たユートピア九龍浦。日本人たちのユートピアは消えたが、子孫たちの胸に九龍浦は懐かしい夢の中の故郷として残っていた”というナレーションで締め括られる<sup>24)</sup>。

映像「第二の故郷九龍浦」は、九龍浦を現在の時点で捉えようとし、九龍浦が引揚者たちにとって「懐かしい」「故郷」になっていることを強調する。歴史館の2本の展示映像に唯一の韓国人話者として登場するソ・サンホは、植民地期の九龍浦を懐かしむ日本人に「一度でも会えたら」と語り、彼らは「昔の友達」だと仄めかす。つまり、植民地期九龍浦で暮らした日本人と朝鮮人との間には警戒や緊張、反目はなく、友情が流れているのである。

しかし、ソ・サンホの実際の語りとそれに対する字幕との間には微妙なズレがある。字幕「日本のことを思うと、(昔の友達に)一度でも会えたら、って思いますね」に該当する彼の実際の語りは<sup>25)</sup>、筆者が訳すと、『日本のことを思い出すと、一度会ってみたいと思うよ』である。加えて、日本人移住者を「友達」とであると話すソ・サンホの語りは、この映像を通じて見当たらない。ここからは、日本人移住者と原住民の朝鮮人とが共存した植民地期の九龍浦で両者は敵対することなく、友好の関係を築いていたと捉える歴史館の「近代歴史」が、括弧付きの「昔の友達」に「一度でも会えたら」という字幕を作り出した可能性が窺える。

以上を通して、文化財委員Bが「文化財的価値を表しにくい」と評した歴史館の展示内容は、貧しい日本人漁師たちにとって黄金のエル・ドラード等に喩えられる九龍浦という捉え方と、その地で友好な関係を結んで暮らした日本人移住者と朝鮮人という解釈に基づいたものであることが明らかになった。では、この「近代歴史」はどのようにして生み出されたのか、次章ではこの問題に焦点を当てて検討したい。

#### 4. 九龍浦の植民地近代を書く： 『韓国内の日本人村：浦項九龍浦で暮した』

##### (1) 日本式建築物の観光資源化

歴史館で語られる九龍浦の近代歴史は、浦項市の観光事業の一環として書かれた。2006年7月に就任した朴承浩浦項市長は、円高によって増えつつあった日本人観光客の「1万人誘致」を目標に掲げ〔浦項市 2009: 249・250〕、日本人観光客にとって魅力的な観光地の整備を進めるべく、市の経済産業局の下に「日本タスクフォース・チーム」を立ち上げた〔浦項市 2010: 21〕。ちょうど同じ頃に九龍浦5・6里の住民たちは地元の日本式家屋を保存・活用すべく、「九龍浦登録文化財推進委員会」(2006)を作り、2007年1月に地元の日本式家屋16棟の登録文化財申請を市行政に求めた<sup>26)</sup>。これを機に市は九龍浦の日本式建築物に関心を示すようになり、前述したとおり、同年12月に登録文化財の申請を行った。しかし既に述べた通り、文化財登録は見送られた。

だが、市は2009年6月に橋本善吉の家屋兼店舗(243番地家屋)を所有者から借り上げ、「九龍浦日本人家屋通り広報展示館」に作り替えた。さらに、2010年から始まった86億ウォン規模<sup>27)</sup>の「近代文化歴史通り観光資源化事業」の主要施設に同展示館を位置づけた上で、大掛かりなりニューアル工事を実施する<sup>28)</sup>。ただここで課題となったのが、新しい展示施設の身をどうするか、ということであった。

2007年に詩集『九龍浦へ行く』(구룡포로 간다)を出版した女性作家のクォンソンヒ権善熙は、市報の『開かれた浦項』(열린포항)に掲載する記事の取材のため、浦項市長と面談する。その時市長から、市が費用を負担するので九龍浦の日本式建築物を素材にして九龍浦の歴史を書いてほしいと頼まれる<sup>29)</sup>。この依頼を引き受けた権善熙は、新しい展示施設の開館まで1年弱しか時間がなかったことを考慮し、文芸界の先輩であり、当時浦項キリスト教放送局の報道局長を務めていたチョチュンイ趙重義に相談し、2人の共同作業で調査・執筆を

進めることにする<sup>30)</sup>。

約7ヶ月間の調査<sup>31)</sup>・執筆を経て2009年3月に刊行されたのが、韓国語版『九龍浦で暮らした：日本瀬戸内海漁師たちの九龍浦での歷程』（구룡포에 살았다：일본 세토내해 [瀬戸内海] 어부들의 구룡포 역정）[조중의・권선희 2009] 及び日本語版『韓国内の日本人村：浦項九龍浦で暮らした』（以下『韓国内の日本人村』）[趙重義・権善熙 2009] である。歴史館の展示内容はこの『韓国内の日本人村』に基づいて作られた。

## (2) 『韓国内の日本人村：浦項九龍浦で暮らした』

貧しい日本人漁師らにとって黄金のエル・ドラードであった植民地九龍浦で統治国の日本人と植民地の朝鮮人たちが仲良く暮らしたとする歴史を書いた『韓国内の日本人村』は、「はじめに」と「あとがき」を除き、全14章（「ここに九龍浦があったのか」「貧しい漁村・香川県さぬき市小田」「朝鮮半島東端の小さな港」「漁場の穴場」「出港」「橋本善吉、錨を下ろす」「新世界の夢」「葛藤が運んでくれた贈物」「富と名誉」「九龍浦の人、日本人」「全盛時代」「敗戦、そして帰郷」「消えたユートピア」「橋本善吉の子孫たち」）から構成されている<sup>32)</sup>。本の題目と目次とも、同書が「日本人村」という視点から九龍浦の植民地時代を描いたことを示している。では、著者の権善熙らはなぜそのような視点に立つようになったのであろうか。

その理由としてまず考えられるのは、歴史館に使われる橋本善吉の住宅兼店舗のような日本式建築物を素材にしているという条件の影響である。さらに、これと共に注目すべきは、著者たちが執筆に必要な資料の確保に苦労したことが挙げられる。

権善熙によれば、植民地期九龍浦に関する韓国語文献は皆無に近く<sup>33)</sup>、当時を覚えている九龍浦の住民も高齢であったため、インタビューなどの調査は難航した<sup>34)</sup>。しかし、引揚者たちが日本で九龍浦会を作ったことを知り、著者たちは彼らに直接会いに日本へ行くことを決める。権善熙にとって九龍浦会員たちとの出会いは、資料不足の問題を「確実に解決してくれる

鍵」<sup>35)</sup>となった。なぜなら、「記録文化が我々(韓国)より発達している日本の場合、極めて小さな漁村にも当時の出漁史が残っていて、さらに個々人の回顧録もちゃんと保管されていた」<sup>36)</sup>からである。

『韓国内の日本人村』の著者たちは日本で重要な話者<sup>37)</sup>に出会う。日本で現地調査を始めた香川県小田村に住む「松本成矩」<sup>38)</sup>である。彼は九龍浦沖に出漁した祖父を持ち、19歳まで九龍浦に住んだ。著者らによると、松本は韓国から来た彼らに「非常に正直に話をしてくれた」[趙重義・権善熙 2010: 21]。松本の語りは、次のように引用されている<sup>39)</sup>。

“私のご先祖さんたちは、魚漁師でした。船乗りには国家だの民族だのという大きな理念はどうでもよかったのです。ただ生存競争から生き残らなければならないというせっぱ詰まった思いと貧しさから抜け出そうとする熱望、そして新しい新天地を築き上げて身分をよくしたいとする夢だけだったのです。”[趙重義・権善熙 2010: 21]

“小田は農業ができません。海に出て漁をしなければ死んでしまいます。でも、海は狭いし、魚も捕れないし…。おそらく新しい漁場を探していたんでしょう。‘朝鮮の九龍浦には魚がたくさんいるらしい!’ そんなうわさを聞いて、(出漁を)決めたんじゃないでしょうか?”[趙重義・権善熙 2010: 31・32]

以上の松本の語りは、次に引用する第1章「ここに九龍浦があったのか」の冒頭に書かれた『韓国内の日本人村』における中核的な問いとその答えに対する根拠となった。

‘ここに九龍浦があった!’という言葉は、誰が言った言葉だったのだろうか? 推測ではあるが、今から約100年以上前の1900年代の初めに、漁をしに海に出ていた日本のある貧しい漁師が九龍浦沿岸の釣りの穴場を見て

言ったのが最初ではないだろうか。(中略) 木の船に乗り、大海に向けて九龍浦まで来なければならなかったその理由とは何であり、またいつ襲ってくるか分からない荒い風と波、そして突風のため死ぬ危険性があるにもかかわらず、それをよそに港を出なければならぬほどせっぱ詰まった時代背景とはどのようなものであったのだろうか？[趙重義・権善熙 2010: 18]

つまり、松本の語りを通して「生存競争から生き残らなければならないというせっぱ詰まった思い」と「海に出て漁をしなければ死んでしま」うくらい貧しかった日本人漁師を見出したのである。

さらに松本の「船乗りには国家だの民族だのという大きな理念はどうでもよかった」という語りは、彼らの境遇と大日本帝国という国家システムとを分離させ、彼らを統治国日本の国民ではなく、単なる漁師として認識させた。著者らは、日本人移住者の引き揚げについて次のように解釈している。

九龍浦に来た日本人漁師たちの夢が崩れさってしまったのは、個人の人生とは関係のない国家の政治的破滅から始まったことははっきりしている。松本さんの記憶通り、九龍浦のユートピアは日本人漁師たちによるものではなく、国家の変わらない本質や民族主義のイデオロギーにより、悲惨にも崩れ去ってしまったのである。[趙重義・権善熙 2010: 21]

気になるのは、韓国人の著者たちが松本の語りに対し、以上のような信頼を寄せた理由である。その背景には、次の3つの要因があったと考えられる。

第一に、農業ができず、海は狭くて魚が獲れない「小田」という日本人移住者の出身地を実際に目で確かめたことが挙げられる。著者らは松本の案内で、小田を見て回り、その視覚的確認を終えた後の感想を「(小田は) 九龍浦南部の牟浦里や長吉里よりも小さな漁村だった。それでも牟浦里や長吉里

の場合、面積は狭いが海と陸地のあいだに耕作できる田畑があるが、小田の場合まさに山と海だけだった」と書いている。

第二は、著者らが目にしたキー・インフォーマント (key informant) の松本の容貌を含む外見の影響である。同書20頁には松本の上半身を写した大きな写真が頁全面に掲載されている。松本に会って視覚的に感じた印象は、次のような解釈へ結びついた。

小田の環境的悪条件と貧しさのために挑戦心と開拓心が沸いてきて九龍浦へ行くことを決めたということに、驚きを隠せなかった。九龍浦とは比較もできないほど小さくてしけた漁村・小田の漁師たちは、このようにして九龍浦に新しい理想郷、新天地を築こうとしていたのだ。100年以上前の瀬戸内海の貧しい漁師たちが頭に浮かんできた。オールを漕いで海に出て漁を行い、1日1日その日暮らしをしてきた貧しい人生。村上春樹の小説<海辺のカフカ>とは違った<海辺のペテロ>の辛い人生を生きていくのに真ッ黒に日焼けした顔に深く刻まれたシワが見えるようであった。[趙重義・権善熙 2010: 32]

即ち、「九龍浦とは比較もできないほど小さくてしけた漁村」小田の「環境的悪条件と貧しさ」に耐えられず、「挑戦心と開拓心」を胸に九龍浦へ渡った「貧しい漁師たち」の姿を、松本の「真ッ黒に日焼けした顔に深く刻まれたシワ」が可視化しているのである。

最後に第三は、松本によって九龍浦会の文字資料のみならず、『志度町史』等の朝鮮出漁に関する文献が入手できたことである<sup>40)</sup>。既に指摘した如く、権善熙は日本で出漁史や回想録等の文献資料が見つかったことに大きな意味を与えており、これらの資料は著者らに「歴史的事実」に出会ったという確信をもたらすようになる。

最初にこの話(日本式建築物を素材に九龍浦の歴史を書く仕事の依頼)が



来た時に、歴史的な日本の侵奪や進出という意味があるだけに、日韓の微妙な関係の難しさに戸惑い悩んだ。誤解される内容を記載することにもなりかねないと心配したりもした。しかし、一つの地域で展開された日本人漁師の進出という歴史的事実をしっかりと調べるということだけでも、有意義なことだと思った。[趙重義・権善熙 2010: 11]

以上からは、植民地期の歴史をめぐる日韓の葛藤や対立が絶えない中、当時の九龍浦を取り上げることに躊躇したことが窺い知れる。しかし、『韓国内の日本人村』を執筆する段階に至った著者たちは、自らの仕事を「歴史的事実をしっかりと調べる」ことであったと評価するまでになっていた。このような自信の背後には、信頼に値すると判断された当事者としての松本の語りや、彼を通して手に入れた文字資料、そして小田における感覚的体験があったことは確かであろう。

では、本書の中で九龍浦の韓国人はいかに捉えられ、彼らの語りはどのように解釈されたのであろうか。権善熙によれば、本書は「一見日帝強占期の九龍浦で日本の漁師たちがどのように暮したのか」というところにだけ焦点を当てているかのように見えるかも知れ」ないが、「実際は九龍浦という舞台の上で一時代をあるがままに耐えながら乗り越えなければならなかった韓国の漁師たち」と一緒に「貧しさから抜け出すために（九龍浦に）来た日本人漁師たちを取り上げ」たものである<sup>41)</sup>。

本書で引揚者と地元九龍浦の朝鮮人がほぼ同じ割合で取り上げられた唯一のチャプターは、第10章「九龍浦の人、日本の人」である。「ユートピアの夢が叶った日本人漁民たちの幸福感の背後に隠されている九龍浦の人々の様子とは、いかなるものだったのだろうか?」という問いから始まる第10章は、その様子を次の文献記録から探る。

朝鮮の人々は、当時、竹二本を棒として、その間に網を張り、海に入って鯖の群れをすくいあげ、海岸におしあげて採っていた。船越の、吉本勘吾

は、県の嘱託だったのか、魚群の様子や、水温等を計っていたそうで、それが、印象的だったと大森百一は語っている。これを聞き伝えて、内泊では、早速鯖魚を兼ねて漁場調査に赴むくことになった。[町誌編集委員会編 1979: 393]

以上は、著者らが引用したとする『西海町誌』の「朝鮮移住第一陣伝聞記」の一部である<sup>42)</sup>。この引用文の後、次の文章が続く。

この内容を見ると、1911年<sup>43)</sup>当時の朝鮮沿岸はサバが溢れるほど魚のたくさん捕れる漁場だった。またこれからもうひとつ分かるのは、わが国の漁師の状態などである。原始的な漁法でサバを捕っている様子を見た日本人が記録しているものである。これから分かるように、韓国の漁民は伝統的な漁業経営から抜け出せずにいた。その結果、発達した漁船や漁業技術、漁道具などではかなり先を行く日本人移住漁民たちに漁場を渡さざるをえなかった。[趙重義・権善熙 2010: 108]

要するに、著者らは「朝鮮移住第一陣伝聞記」の記録から、1910年代の朝鮮沿岸——その一部であった九龍浦沿岸——が「魚のたくさん捕れる漁場」であったことや、韓国の「漁師の状態」、つまり、豊かな自然資源を有しながらも「伝統的な漁業経営から抜け出せずにいた」がために「先を行く日本人移住漁民たちに漁場を渡さざるをえなかった」ことを導き出している。さらに著者たちは、このように日韓の漁師の間に存在した漁業技術の格差によって日本人移住者と朝鮮人原住民との間に「雇用関係」[趙重義・権善熙 2010: 111]が生まれたと解釈する。

九龍浦に定着した日本人と朝鮮人のあいだには、自然に雇用関係が形成されていった。反感を買ったり不満を持つ朝鮮人は多くなかったようである。[趙重義・権善熙 2010: 112]

つまり、九龍浦に移住し、雇用を生み出し雇い主になった日本人に対し、雇われた朝鮮人が「反感」や「不満」を抱くことは「多くなかった」と捉えている。では、この推測の根拠はどのように示されているのであろうか。

第10章は、日本人と韓国人1人ずつの語りを引き合いに出している。まず日本人の話者は、九龍浦で生まれ14歳の時に引き揚げた「萱野美都子」である。萱野は引き揚げ時の様子を次のように語った。

“終戦になってからすぐに、九龍浦で暮らしていた日本人たちがこぞって荷物をまとめ始めました。日本に帰る準備です。その時九龍浦に住んでいた住民の中には、引っ越しの準備を手伝ってくれた人もいたし、船に荷物を乗せるために港の船着き場まで持って行ってくれた人もいました。船着き場には、日本に帰ろうとする人たちの荷物の列が並び、九龍浦の人たちはその姿を見ようと並んでいました。”〔趙重義・権善熙 2010: 115〕

以上の萱野の語りは、著者らによって次のように解釈された。

(萱野は著者たちに) 九龍浦の朝鮮人たちが自分たちに友好的であったことを教えてくれた。敵対心のような気持はなく、親友も多くて、大人社会においてもお互い親しく付き合っていたそうである。〔趙重義・権善熙 2010: 115・116〕

要するに、著者らは萱野の語りを通して「九龍浦の朝鮮人たちが日本人移住者に「友好的」で「敵対心のような気持はな」く、「お互い親しく付き合っていた」関係を見出しているのである。しかし萱野の語りにある引き揚げの際に荷造りや荷物の運搬を「手伝ってくれた人」は、朝鮮人の隣人や友人であったろうか。もちろんその可能性も否定はできないが、その一方で日本人に雇われた朝鮮人という可能性も十分ある。また、引き揚げる日本人た

ちの姿を「見ようと並んでい」た「九龍浦の朝鮮人たち」は、彼らとの別れを惜しんで見送りに来ていた可能性もあるが、他方ではその光景の物珍しさの故にただ見物に来ていた可能性も想定できる。

第10章に登場する韓国人話者の「キム・マルチョム」は、当時の九龍浦神社の秋祭り<sup>44)</sup>について次のように語った。

“お祭りは、(九龍浦)神社で始まり神社で終わっていました。お餅も作って食べていましたが、このお祭りは日本人だけがやっていて、朝鮮人は参加していませんでした。だからといって朝鮮人が祭りを台無しにしたり妨害したりもしませんでした。ただ楽しく見物していたんです。”[趙重義・権善熙 2010: 116・118]

以上の語りで注目すべきは、日本人の秋祭りを朝鮮人が邪魔しなかったという事柄より、当時の日本人と朝鮮人がその居住地だけではなく、文化的にも分離していたことである。しかしキム・マルチョムによると、両者が関わり合う場面も次のように存在していた。

“ナナは朝、日本人の家に行き、夜9時頃帰宅していました。また、日本人の家に住み込みで子供たちの世話をしているケースもありました。彼女たちはわずかの手当てをもらって仕事をしていましたが、1、2ヶ月ほどすると、特別勉強をしたわけではないのにみんな日本語を上手に話していたのを思い出します。”[趙重義・権善熙 2010: 118]

上の引用文は、日本人の家で子供の世話をした「ナナ」と呼ばれる15・16歳ぐらいの朝鮮人の女の子について語られたものである。ここから推察するに、植民地九龍浦で日本人と朝鮮人が関わり合ったのは主に雇用関係においてであった。

他にも日本人の結婚式や葬式などに関する記憶を述べたキム・マルチョム

の語りは、筆者らによって次のように解釈されていった。

1900～1945年当時の九龍浦住民の内情を知るすべはない。お互いに調和して共存していたが、推測では少しはぶつかり合ったり好奇心の中でお互い警戒しあっていたのではないかと思われる。朝鮮人は、彼ら（日本人移住者）によって活気立ちはじめた港の様子に順応し、日本人は土地の者だと威張らずに自分達を好奇心で見つめていた朝鮮人に慎重な思いで共存の知恵を身につけていったと思われる。〔趙重義・権善熙 2010: 120・121〕<sup>45)</sup>

既に述べた通り、萱野の語りについて著者らは、九龍浦の朝鮮人が日本人に「友好的」で「お互い親しく付き合っていた」ことを「教えてくれた」と評価した。しかし、キム・マルチョムの語りについては「当時の九龍浦住民の内情を知るすべはない」と曖昧に処理している。興味深いのは、「少しはぶつかり合ったり好奇心の中でお互い警戒しあっていた」かも知れないものの、やはり両者は「調和」しながら暮らしたという関係性の強調である。このようなスタンスは、1918年に九龍浦で生まれ育ったソ・サンホの次の語りを『韓国内の日本人村』の裏表紙に掲載<sup>46)</sup>したことからも明らかである。

“冬には時々雪が積もりましたが、そんな時には日本人の子と朝鮮人の子が一緒になってソリに乗って遊びました。(中略)手足が冷たくなっても、毎日が楽しい日々でした。こうして夕方になるとそれぞれ家に帰り、朝にはまた一緒に遊んでいました。”〔趙重義・権善熙 2010: 77〕

上の語りにある「日本人の子と朝鮮人の子が一緒」に「遊び」、「毎日が楽し」かったという表現は、日本人移住者と朝鮮人原住民とが友好な関係を結び、調和して暮らしたとする筆者らの見方をさらに裏づけている。

以上をまとめると、『韓国内の日本人村』は、劣悪な生業条件に耐えられず、新たな漁場を探し求めた貧しい日本人漁師たちが水産資源豊富な九龍浦

を見つけて定着し、九龍浦の朝鮮人たちと仲良く暮らした植民地九龍浦の近代を描き出している。

## 5. 引揚者と「懐かしい故郷」九龍浦

最後に本章では、植民地九龍浦における日本人移住者と朝鮮人の友好関係や、日本人移住者にとって「懐かしい故郷」という意味が与えられた九龍浦という捉え方を、九龍浦会会員でもある引揚者たちの語りや九龍浦会の記録を通して考察したい。

九龍浦会会員に直接話を聞きたいと思った筆者は浦項市庁(市役所)に相談し、歴史館の展示映像に登場する九龍浦会会長(撮影当時)の石原英雄と、九龍浦にあった真言宗龍光寺住職の息子であるA氏(1935年生)の連絡先を得ることができた<sup>47)</sup>。先にコンタクトを取ったのは石原である。電話でインタビューを依頼したが、断られた。その後、A氏に電話しインタビューをお願いしたところ、承諾が得られたので、2014年11月7日に名古屋市内で会い、話を聞くことができた。さらに、A氏から「十河弥三郎」<sup>48)</sup>の孫娘であるB氏(1935年生)を紹介してもらった。B氏に対しては2015年1月23・24日に大阪市内でインタビューした。この調査にはB氏の妹、つまり、十河弥三郎のもう1人の孫娘であるC氏(1944年生)も同席したので、C氏からも話を聞くことができた<sup>49)</sup>。以下では、A氏・B氏・C氏の語りを考察の対象とする。

戦後引き揚げた日本人移住者については、植民地期に「物理的にも社会的にも現地(朝鮮)社会と分離された自分たちの世界を構築」し、「朝鮮人との関係や接触は生活に必要なサービスや労働を安く活用すること」[권숙인 2008: 131・132]に重きが置かれたことや、「多くの在朝引揚者は植民地朝鮮で‘朝鮮人と仲良かった’」[차은정 2014: 292]ことを強調する傾向が著しいことなどが既に先行研究の中で指摘されている。上記の3名に対するインタビューでもそのような特徴が見られ、特に当時の朝鮮人との付き合いは



おおむね良好であり平和に暮らしたとする趣旨の語りが多く聞かれた。ただ注意しておきたいのは、生まれてすぐ九龍浦を離れたC氏を除き、A氏・B氏とも九龍浦では幼少期を過ごしたただけなので、九龍浦をめぐる記憶の語りは断片的にならざるを得ないということである。

例えば、A氏の場合、「朝鮮人はタラとか鰯も食べないんですね。生でも煮ても食べなかった！干して食べるくらいだったね」「うちのおやじは（朝鮮人と）融和しようと、何かあったら（朝鮮人の）部落に行ってね、（朝鮮人の部落では）お婆さんをお屋敷の中に何人も（置いていた）！ヤンバン、ヤンバン<sup>50)</sup>の家ね。朝ごはん食べにいらっしゃいと言われるから、おやじと一緒に食べに行ったらね（笑）、色々あったみたいですよ」「朝鮮の人のお葬式が面白かったですね！もうわいわい泣いてくると、あとからお葬式の列が付いてくるんですよ、アイゴ、アイゴってね。（九龍浦神社の）お祭りよりすごかった。ヤンバンのお葬式だったけどね。お祭りよりすごかった！葬式の行列は鮮明に覚えているけど、（九龍浦神社の）お祭りとかはね…さあ…」のように、九龍浦における日本人と朝鮮人の異化された生活空間の境界を越えて見聞きした朝鮮の異質な文化について断片的に語る傾向が見られた。

本稿の目的に照らしてフォーカスしたいのは、A氏による次の語りである。

私（A氏）の家なんか、朝鮮人のまちと日本人のまちのちょうど境目にあっただけですよ。終戦の時にいわゆる暴動が起きてね。

（筆者）暴動ですか。どんな暴動だったんですか。

闇に石が飛んできて日本に帰れ、帰れって！屋根のところに石が飛んできたんですよ。うちが（朝鮮人の）部落に一番近かったからかも知れないな。だからもうだめだと思いましたね。

以上からは、龍光寺を境に高台にあった朝鮮人の集住地からA氏の家屋に向けて石が投げられ、「日本に帰れ、帰れ」と怒鳴られた状況が浮かび上

がる<sup>51)</sup>。

その後A氏の家族は、橋本善吉所有の大きな運搬船に乗って引き揚げた。当時の九龍浦の朝鮮人の様子について尋ねると、A氏は「うちの使用人の人たちは特に邪魔とかはしなくて、惜しんでくれているような気はするけどね。それで荷物を港に運んでくれたりしてましたよ」「白磁をヤンバンがくれるわけよ。でもそれは持って帰れないでしょう。だから倉庫に置いて、(朝鮮人の)使用人たちが、うちが守りますとか言ってたけどね」と答えた。即ちA氏は、A氏家の「使用人」が引き揚げ作業を手伝ったり、付き合いのあった「ヤンバン」から餞別を贈られたりしたことを挙げて、九龍浦の朝鮮人たちと友好的な関係にあったと述べている。このように日本人移住者と雇用関係にあったり特別な付き合いのあった一部の朝鮮人を引き合いに出して、当時の朝鮮人との関係はおおむね良かったと解釈する認識や語りは、次のB氏とC氏の語りからも確認できる。

当時の日本人と朝鮮人との関係についてB氏は「韓国の人たちにとってはどうだったか分かりませんが、従業員といえますか、お手伝い、女中さんとかには優しくしてあげていました」と語った。さらに、それを聞いたC氏は「(終戦になっても)向こう(朝鮮)の(使用人の)方が母にお宅はもう帰らないでって、ちゃんと私たちが守るから帰らないでここで暮らしてって、母親は言っていました。でもそういうふうにはいかないからって(母親は言った)」と付け加えた。このようにB氏・C氏も、雇い主の日本人と、「お手伝い」「女中さん」のように雇われる側にあった朝鮮人との関係に基づいて九龍浦における日本人移住者と朝鮮人はお互いを思いやる友好的なつながりを持っていたと語った。

しかしA氏と同様に、B氏もそのような関係性から乖離したある出来事に触れた。つまり、終戦後B氏が小学校に登校する途中、「朝鮮人らしい5～6人ぐらいの子供たちからいきなり小石を投げられ」たことである。幸いにもその石には「だれも当たらなかった」そうである。

日本の敗戦が決まってから当時の九龍浦の朝鮮人から石を投げられたとい

うエピソードは、A氏・B氏の語りや、『韓国内の日本人村』及び歴史館が強調する日本人移住者と朝鮮人との間にあった友好的かつ良好な関係性には結びつかない社会的現実や感情が当時存在していたことを物語る。これに関連して参考になるのが、B氏・C氏の父親で十河弥三郎の次男であり、九龍浦会を始めた十河薫が1978年に書いた「九龍浦小史」(ルビは原文のまま)の中の次のくだりである。

私は、大正9年朝鮮独立<sup>ママ</sup>万才騒ぎの最中コレラで母を喪いましたが、当時夜になると父や兄は日本刀を腰に夜警、私達女子供は沖に繋いでいる貨物船に泊りに行く、と言う毎日でデマが乱れ飛んでいました。[十河編 1978: 20]<sup>52)</sup>

上記の引用文からは、朝鮮の独立を求める全国的な万歳運動が起こると、十河家の成人男性は「日本刀を腰に夜警」し、「女子供は沖に繋いでいる貨物船に泊りに行く」日々を送るくらい、九龍浦の朝鮮人に対し警戒心や恐怖心を抱いていたことが分かる。もちろん、このような緊張は独立運動という非常事態に触発された一時的な反応だったかも知れない。とはいえ、話者3名が強調した九龍浦における日本人と朝鮮人の友好関係と、日本の敗戦後に朝鮮人から石を投げられたり、独立運動の展開を受けて日本人男性が日本刀を身につけ夜警し、女性や子供は九龍浦沖合の船に避難させたりしたこととの間には明らかなズレがある。

次に、「懐かしい故郷」九龍浦という捉え方について考えてみたい。歴史館や『韓国内の日本人村』が描き出すこの認識には、次のような3つの特徴が指摘できる。

第一に、懐かしい故郷九龍浦は、引揚者の暮らした植民地九龍浦に限られており、彼らが引き揚げた後の九龍浦とは乖離しているという点である。最初のインタビューの際に初版『韓国内の日本人村』の誤謬をメモした紙<sup>53)</sup>を持参したB氏は、同書の「日本での取材当時、十河薫の娘(原文には実

名記載、B氏)に出会った」[趙重義・権善熙 2009: 67]と書かれた箇所を開き、「もうその腹立たしきと言ったらね」と言い放った。つまり、実際には会っていないのに会ったかのように偽って書いたことに対する非難であった。インタビューの途中で筆者が石原に会えなかったことに言及すると、B氏はそのことを既に知っていたらしく、次のように話した。

(石原さんは『韓国内の日本人村』の)内容自体が気に入らないと言っているし、私(B氏)にも悪いと言ってすごい気づかってくれているんですよ。自分がいい加減なことを言ったからなんだと。

筆者は石原に直接話を聞いていないので、「気に入らない」内容が何かは定かでないが、「自分がいい加減なことを言った」というのは、B氏によると、十河弥三郎やその家族について石原が話したため、著者らは石原の言ったことを『韓国内の日本人村』に書き、それをB氏から直接聞いたかのように偽ったという意味らしい。確かに電話をかけた筆者に対し石原は「九龍浦のことはもういいです」と冷たい口調で言い、インタビューを断った。

第4章で指摘したように、「歴史的事実をしっかりと調べる」作業として『韓国内の日本人村』の執筆を位置づけた著者らが事実とは異なる書き方をわざとしたことは明白な誤りであり、非難は免れない。しかし、筆者はこの過ちに対する石原やB氏・C氏の反応に接して違和感を覚えざるを得なかった。なぜなら、歴史館の展示映像や『韓国内の日本人村』の中で引揚者たちによって語られた「懐かしい故郷」九龍浦の脆弱さに気づいたからであろう。つまり、上述した著者たちの過ちがもたらした石原の「九龍浦のことはもういい」という反応やB氏の「腹立たしき」という感情表現は、次のC氏の語りと共に、懐かしい故郷九龍浦における「九龍浦」が現在の交渉や介入を許さないもの、換言すれば、彼らが生まれ育った当時の「九龍浦」に限定されていることを示す。

普通に考えたら、これだけの村で、ある意味とても重要な立場にいたわけだから、本当に歴史を正しく認識しようと思えば、十河に対しての取材が一切ない状態で、この本が出るということ自体がおかしいんですよ。

さらに、十河弥三郎の頌徳碑（以下「頌徳碑」、写真4）に関するB氏・C氏の次のやり取りも示唆的である。碑文の上にセメントが塗られたまま残っている頌徳碑<sup>54)</sup>に話題が移り、筆者はこのような状態で頌徳碑が残存する理由についてB氏・C氏に意見を聞いた。これに対しB氏は「さあ」と言って少し考えた後、次のように話した。

（B氏）あの（頌徳碑の）石は、日本から運んできた石なんですよ、一枚岩なんですよ。韓国では買うこともできない、作ることもできない、そういう石なんです。一枚岩だから、すごい…売ってもお金になるから、韓国



写真4 十河弥三郎頌徳碑（2017年1月17日筆者撮影）

の人が壊さなかった…(笑)、私はそうふうに読みました。

さらに、C氏も加わり、次のように対話が続いた。

(C氏) そう言ってたよ! まえ(九龍浦に)行った時に、なぜ残ったかと聞いたら、この石が非常に貴重なものだからとか…(笑)。

(筆者) 誰がそう教えてくれたんですか。

(C氏) う〜ん、ちょっと覚えてないけど、案内してくれた方だったかな…。

(B氏) (頌徳碑は) 日本のも<sup>の</sup>だ<sup>っ</sup>た<sup>け</sup>れ<sup>ど</sup>、外<sup>国</sup>の<sup>も</sup>の<sup>に</sup>な<sup>っ</sup>た<sup>ん</sup>で<sup>す</sup>ね。

以上からは、B氏・C氏が彼らの引き揚げ後の九龍浦で頌徳碑の碑文が塗り消されたことについては敢えて言及せず、それが建立された当時に時間軸を置きつつ、希少性のある碑石の価値に結びつけて頌徳碑の残存を解釈していることが読み取れる。頌徳碑は「日本のも<sup>の</sup>だ<sup>っ</sup>た<sup>け</sup>れ<sup>ど</sup>、外<sup>国</sup>の<sup>も</sup>の<sup>に</sup>な<sup>っ</sup>た<sup>ん</sup>で<sup>す</sup>」というB氏の表現は、彼らが暮らした植民地九龍浦と今の九龍浦との間には溝があり、懐かしい故郷九龍浦はその前者に限られる閉鎖的構造から成り立っていることを示す。

次に、懐かしい故郷九龍浦という捉え方の第二の特徴は、「懐かしい」という感情が向けられる対象が、九龍浦というより引揚者の幼少期なのであり、その時代に対するノスタルジア<sup>55)</sup>と共に存在するという点である。例えば、「よく覚えているのは魚釣り。こんな太刀魚が餌なしでも獲れたんですよ! 本当にいっぱい獲れた! 楽しかったですね」というA氏の語りや、「うに饅頭というおやつがおいしかった! 皮が黄色で白あんとかがいっぱい入っていたことをよく覚えてい」とか「(小学校で) お弁当にうどんの配達に来ていたこともあります(笑)。〇〇君のね、珍しいでしょう?」というB氏の語りから推測できるように、A氏とB氏は九龍浦を幼少期の思い出の

地として語っている。これについては、九龍浦会会員の中川敏夫が書いた「九龍浦<sup>ママ</sup>の思い出の数々」という作文の次の一節も特筆に値する。

九龍浦と云えば日本人 190 世帯 900 名余の漁港でしたが、幼ない頃の我達の思い出の地としていまだに脳裏に浮んでおります。[十河編 1988: 11]

要するに、懐かしい故郷「九龍浦」は「日本人 190 世帯 900 名余の漁港」であり、引揚者の「幼ない頃」の「思い出の地」なのである。

最後に第三の特徴は、引き揚げによって引揚者が被った苦難を乗り越えた後に回復した故郷だという点である。

私の生れ育ったふるさととは海の向ふへなりました。けれど年一度の皆様との再会<sup>ママ</sup>はふるさとに帰ったような思ひがしてうれしきでいっぱいです。  
[十河編 1988: 13・14]

以上は、萱野美都子が書いた「なつかしい九龍浦会<sup>ママ</sup>」の一部である。この引用文に注目すると、「生れ育ったふるさと」、つまり、物理的な地域としての九龍浦は「海の向ふ」、既に引用した B 氏の言葉を借りれば「外国」になったが、その地で一緒に暮らした日本人移住者たちとの「再会」によって「ふるさとに帰ったような思ひ」、言い換えれば、心理的な「ふるさと」を取り戻したと感じていることが分かる。次の十河薫の文章は、示唆に富む。

高雄貞子さんから私達があの儘九龍浦に居たらこんなに沢山の方々と親しくなれただろうか。これは終戦の御影であり何だか皆さん大きな家族の様な気がします。とのおたよりを頂きましたが全く同感です。引揚げ後誰もが色々な苦勞様々な難儀にぶつかった事と思ひますが、それを乗り越えて楽しい会合を毎年持てる様になった今日の姿は実に素晴らしい限りです。此の喜びを墓場迄持って行こうではありませんか。[十河編 1988: 1]



上記の引用文が示すのは、敗戦がもたらした故郷の剥奪とその後引揚者が経験した「色々な苦労様々な難儀」、さらにそのような引き揚げ後の苦難を「乗越え」た後に得られた「大きな家族」、そしてその家族と共有できる思い出の地としての九龍浦という故郷の回復である。ここで重要なのは、引揚者にとって懐かしい故郷九龍浦は、実体としての故郷の喪失と引き揚げ後の苦労という経験の共有がもたらした心理的な構築物に等しいということである。

さらに、66歳であった十河薫<sup>56)</sup>が九龍浦会を始めたのは「生活が安定して、ある年齢になった時に自分が生まれたところに思い入れが強くなっ」たからだというC氏の説明を考え合わせると、引き揚げ後の苦難を乗り越え安定した生活が手に入ったことや高齢という要素も故郷探し・故郷づくりの動因として機能したことは明らかである。

## おわりに

本稿は、九龍浦の植民地近代の解釈と記述をめぐる問題を明るみに出すべく、九龍浦近代歴史館が展示する地元九龍浦の「近代歴史」が、韓国のナショナルな文化財登録の過程で修正を求められたことに焦点を当てて考察した。その結果、韓国の登録文化財としての価値を鑑定・審議した文化財庁の文化財委員たちが求める歴史——日帝強占期の収奪・侵奪の歴史——を展示していない＝表していない歴史館の建物は文化財的価値を有しないと判断され、2回に亘って行われた文化財登録の申請が受け入れられなかったことが明らかになった。

さらに本稿は、このように文化財登録という国家の手続きによって否定された歴史館の近代歴史はどういう内容のものなのか究明すべく、歴史館の展示内容と、その基となった『韓国内の日本人村』の中身を検討した。ここから見えてきたのは、日本式建築物に対する市主導の観光資源化の一環として

これらの建物を素材にした九龍浦の歴史記述プロジェクトが始まり、それを担当した2人の著者たちは、調査研究方法の制約を受けつつ、植民地九龍浦の日本人移住者であった引揚者らの語りや彼らから提供された日本語の文献を中心に調査したことである。その結果、新たな漁場を探し求めた貧しい日本人漁師たちが朝鮮の水産資源豊富な九龍浦を見つけて定着し、原住民の朝鮮人たちと「友好」な関係を結んで平和に暮らしたこと、さらに、引き揚げた日本人移住者らにとって九龍浦は「懐かしい故郷」になっているという近代歴史がまとめられた。

以上を踏まえた上で本稿は、植民地九龍浦における日本人と朝鮮人との友好関係や引揚者にとって懐かしい故郷として意味づけられた九龍浦という近代歴史を、筆者によるインタビュー資料と九龍浦会の文献資料に基づいて読み直そうと試みた。そこで明らかになったのは、次の2つである。一つは、筆者が話を聞いた話者3名とも確かに日本人移住者と朝鮮人の友好関係を強調する傾向が顕著に見受けられたものの、実はそれが植民地九龍浦の社会的現実や他の住人らの感情の全てではなく、特定のポジションに影響され語られる部分的側面に過ぎないという点である。さらにもう一つは、引揚者たちが懐かしい故郷九龍浦と語る際の「九龍浦」は、彼らが生まれ育った植民地九龍浦として区別され、戦後の九龍浦とは隔たりのあること、より正確に言うなら、懐かしい故郷九龍浦は実体としてではなく、彼らの幼少期のノスタルジアによって具現化し、さらに引揚者としての苦難を乗り越えた経験を共有することによって意図的に想像され呼び戻される対象だという点である。

では、以上のような九龍浦の植民地近代の解釈と記述をめぐる問題についてどういう見方が可能であろうか。

歴史館が位置する九龍浦近代歴史通りには2013年にオープンした「古里ステーション古里家韓日文化体験館」という名の個人経営の店があり、着物・浴衣といった日本の伝統衣装の着付け体験を有料提供していた。しかし、2015年8月15日の「光復節」という韓国の祝日に着物や浴衣を着用して通りを歩き記念撮影を楽しむ韓国人観光客たちの姿が同年同月17日付の

『文化日報』(「光復節に着物で闊歩」)が取り上げ、批判を呼んだ。さらに、同年11月にはフェイスブック(facebook)上の情報サイト(「クルティブ特攻隊」)が「人生ショットのための異色の衣装の貸出」と題した記事の中で「着物、浴衣を着て近代文化の感じられるまちを歩こう」という見出しの下、上述した日本の伝統衣装の体験を紹介したことがいくつかのメディアで取り上げられ、波紋を呼んだ。その結果、古里ステーション古里家韓日文化体験館は2016年1月から3月まで臨時休業し、4月以降は予約制で運営することとなった。さらに、この事態を受けて、市は2016年に九龍浦近代歴史通りを「九龍浦日本人家屋通り」に名称変更するに至った。

2016年1月7日付『ソウル新聞』の「着物を着ないと痛い歴史を体験できませんか」と題された記事には、歴史学者と紹介されるチョン・ウヨンによる「近代文化の体験をするのであれば、(日本人の)着物や浴衣ではなく、(朝鮮人の)人力車の車夫か荷担ぎの衣服を着るべき」だという意見が掲載された。

以上のような一連の報道やチョン・ウヨンの主張から推察するに、侵奪する日本・日本人に対し、侵奪される韓国(朝鮮)・韓国(朝鮮)人という二分法的認識の構図に基づく植民地近代の歴史観の故に、収奪の地である九龍浦で収奪される側にあったはずの韓国人が、収奪する日本人の象徴である着物を身にまとい九龍浦のまちを楽しく歩く姿は容認されず、厳しく非難されたのである。さらに、このようなスタンスが、既に詳述した文化財庁文化財委員たちの歴史観であり、これが歴史館の建物は韓国の文化財に値しないと判断された理由であることは言うまでもない。

上述した歴史観や認識の枠組みは、はじめの部分で引用した李勛相の表現を借りれば、標準化された歴史知識に支えられ、単一な声のみを認める排他的なものである。このような民族主義的な植民地近代観が、国家の文化財システムや展示等を通して揺るぎのないものになりつつある現状に鑑みると[Kim 2014]、『韓国内の日本人村』を韓国人作家2人が書き、九龍浦の歴史館の展示を市立の公共の場で行っていることは、植民地期に対する歴史の語

りの多声性や記述の多面性をその実践において可能にしたこととして評価に値する。つまり、20 世紀前半の植民地九龍浦に日本人移住漁村が形成され、終戦直後まで 200 戸前後<sup>57)</sup>の日本人が暮らしたことは否定できないファクトだからである。

しかし、歴史館の展示や『韓国内の日本人村』が描き出す九龍浦の「近代歴史」もまたその一部に過ぎないことは既に指摘した通りである。日本人観光客に配慮しようとした市行政や、引揚者との出会いに感動した著者らの両方とも九龍浦の「近代歴史」を語り、文字化することの重みを軽視し、拙速に処理してしまった。地域における人間生活の諸相を豊富かつ多面的に描き出すことは決して簡単ではない。しかし、その努力を地道に続けることこそが重要であろう。

歴史館や資料館、博物館などは特定の歴史観や価値観を押し付ける場ではなく、そこに展示された資料群を基に自ら考え、他の来館者たちと語り合える場でなければならない。ただ、九龍浦日本人家屋通りを舞台に制作され 2019 年に KBS が放送したドラマ『椿の花咲く頃』(동백꽃 필 무렵) が大ヒットしたこともあり、歴史館の建物の文化財登録や、展示・歴史記述の問題から市の関心は薄れているように思われ、今後その反省や見直しが真剣に行われるかどうかは疑問である。しかし、観光客が増えつつある今だからこそ、地元九龍浦の近代と現在について住民たちが中心になって改めて語り合うべきであろう。

## 注

- 1) 本研究は、国立歴史民俗博物館の共同研究「海の生産と信仰・儀礼をめぐる文化体系の日韓比較研究」(研究代表者：松田睦彦、平成 27～29 年度)の助成を受けたものである。
- 2) 1995 年 1 月 1 日「新年辞」の中で当時の金永三大統領は「今年は地方化の時代が始まる年」であると位置づけつつ、「地方化無くして世界化はあり得ない」と強調した(「世界・地方化の時代を開こう」『毎日経済新聞』1995 年 1

月1日1面)。なお、本稿で引用する新聞等の記事は、特に断りのない限り、韓国語で刊行またはオンライン公開されたものである。

- 3) 「開かれる地方化の時代 成功の条件①独り立ち」『京郷新聞』1995年1月13日5面。
- 4) 詳しくは、拙論を参照されたい[2017: 33~35]。なお、本稿の内容の一部は拙論の中でも触れているが、ここでは本稿の問題設定に基づいてより詳細な考察を加えたことを予め断っておきたい。
- 5) 2012年の拙論では同参考文献の刊行年度を2009年と記したが、正しくは「2008年」である。
- 6) 韓国の中央行政機関の単位である「部」は、日本の「省」に相当する。
- 7) 『全国文化基盤施設総覧』における施設一覧は、韓国の地方自治体からの報告に基づいて作成されるため、韓国内の全ての施設情報が掲載されているわけではない。
- 8) 「文化財専門委員」は、任期2年の非常勤委員であり、「文化財庁長や各分科委員会の委員長から命を受けて審議事項に関する資料収集・調査・研究と計画の立案を行い、当該分科委員会に出席して発言できる」立場にある(「文化財委員会規定」第11条)。
- 9) 文化財庁近代文化財課2013『2013年度文化財委員会(近代文化財分科)第5次会議録』、170頁；文化財庁近代文化財課2008『文化財委員会会議録2008〔下2-1巻〕埋蔵文化財・近代文化財分科』、606頁。
- 10) 10棟のうち、現地調査者の意見が一致した5棟のみが文化財登録可という結論になった[文化財庁近代文化財課2008: 606]。
- 11) この引用文における括弧・傍点は筆者による。以下本稿では、原則この通りである。
- 12) 九龍浦には法律で定めた行政単位としての里<sup>リ</sup>が全部で7つあり、このうち、日本式建築物が多く残っているのは九龍浦5里と6里である。243番地家屋は九龍浦6里に位置する。別途説明がない限り、本稿で「九龍浦」とは九龍浦5里と6里を指す。
- 13) 文化財登録が保留され、2回目の現地調査が実施された理由や事情の詳細は定かでない。事態の成り行きや雰囲気などから推察するに、予告期間中に当該建物の文化財登録に関する異議が申し立てられた可能性が高い。
- 14) 建築物の沿革の明確さという点で243番地家屋との違いは、旧朝鮮銀行群山支店の建物は建築年度だけでなく、設計者(中村興資平・岩崎徳松)も明らかであるという点のみが挙げられる(施行者は両方とも不明)[文化財庁近代文化財課2007: 1048]。
- 15) 当該建物を含む日本式建築物を活用した群山のまちづくりについては、拙論[2012]を参照されたい。

- 16) 筆者は2010年にこの建物を直接目にしたが、「プレイボーイ」という大きな看板が掛けられたままであった。2階にカラオケがあり、地元住民によると、いつも物騒な場所だったと言う。群山には米軍基地が駐屯しているため、米軍を対象にした水商売の店やカラオケ等の遊興施設が一带に多くあった。
- 17) 「濁流」は、蔡萬植の代表的な近代小説のタイトルである。
- 18) 当該調査報告を掲載した会議録〔2013〕では各文化財委員が匿名処理されている。
- 19) 以下本稿では、歴史館の日本語訳をそのまま引用する場合、「ママ」と付すことにしたい。
- 20) 原則日本語バージョンの展示映像を検討の対象とし、字幕にはカギカッコ、ナレーションや日本人の実際の語りには二重引用符を付ける。
- 21) 正しくは「鮮海出漁者功労碑」である〔志度町史編さん委員会編 1986: 145・146〕。
- 22) 「九龍浦会」は、「九龍浦在住者の大半は、小田村を中心とした香川県の人で、落ち着き先も郷里と下関が主で、よく会い消息も知り易いので、引揚者と言う観念が若干薄いきらいがあ」〔十河薫編 1978: 19〕 と思っていた十河薫に石丸正美から新しい名簿づくりへの協力要請があったことをきっかけに1978年に結成された。同年10月に岡山市で開かれた第1回九龍浦会には124名が参加した〔十河薫編 1980: 1〕。
- 23) 韓国人の語りの場合、日本語字幕にカギカッコ、筆者の翻訳には二重カギカッコを付ける。
- 24) このナレーションの後、当時の浦項市長が登場し、九龍浦近代歴史館を含む「九龍浦歴史文化通り」が「韓国人はもちろん、日本人や全世界の人たちに、歴史の生きた教育の場」として作られたことを述べる。
- 25) 韓国語の字幕にも括弧つきで「昔の友達」が書き加えられている（「일본 생각 나면 (옛 친구를) 한번 만나봤으면, 그런 생각이 나지 .」)。
- 26) 九龍浦の日本式建築物の保存と活用に関心を持ち、九龍浦登録文化財推進委員会を結成するなど、中核的な役割を果たしたのは九龍浦3里で生まれ育ったI氏（1959年生まれ）である。I氏にはソ・サンホさんの紹介や貴重な資料などを提供していただいた。記して感謝したい。
- 27) 1円は約10ウォン。
- 28) 浦項市庁自治行政局文化芸術課チェ・サンス氏の説明による（2015年6月9日）。
- 29) パク・ウンジュ&イ・チョルウォン「[私の都市 私の人生] どこにもない物語」『chosun.com』2010年3月16日（オンライン記事）。
- 30) 「朝の広場 時事フォーカス 権善熙インタビュー」『KBS 浦項ラジオ』2009年4月23日放送。権善熙は、このラジオ番組に電話で出演し、調査方法や感



想などについて述べた。

- 31) 『韓国内の日本人村』の記述から推察するに、日本での調査は2008年9月頃に行われ、権善熙と趙重義の他に1人の男性通訳が同行した。
- 32) 改訂版には「改訂版の発刊にあたって」「日本九龍浦会訪問記」が付け加えられている。
- 33) 植民地期九龍浦を対象にした学術的な研究成果は2010年以降発表された[이창언 2010; 홍금수 2013]。
- 34) 「朝の広場 時事フォーカス 権善熙インタビュー」(注30)。
- 35) 同上。
- 36) 同上。
- 37) 『韓国内の日本人村』には話者として引揚者6人と九龍浦居住の韓国人3人が登場する。
- 38) 『韓国内の日本人村』によると、当時88歳であった。
- 39) 2人の著者は日本語ができなかったため、通訳を介して調査したことは既に触れた通りである。調査の場で日本語で語られたことがしっかり記録され文字化されたかは、言語の問題もあり、疑問が残る。さらに、日本語版は韓国語版の翻訳版(訳者は中嶋一)である。なお、以下本稿で話者の語りを引用する際は、二重引用符を付すことにする。
- 40) 本書の最後には「今回お世話になった日本の九龍浦移住二世・三世の方々には、感謝を申し上げる。特に、香川県小田に在住する松本成矩さんの厚意と資料提供には、重ねて感謝を申し上げたい」[趙重義・権善熙 2010: 172]という謝辞が述べられている。
- 41) 「朝の広場 時事フォーカス 権善熙インタビュー」(注30)。
- 42) 『韓国内の日本人村』には、引用頁数が記載されていない。さらに、孫引きや、引用文と著者たちの文章とが混用されているため、正確にどの箇所を引用したのか定かでない。そのため、最も可能性の高いと思われる箇所を引用した。
- 43) 『西海町誌』には「朝鮮移住第一陣伝聞記」が「明治44年5月」に行われた「集団移住」の様子を「伝承をもとに記録」した内容であることが明記されている[町誌編集委員会編 1979: 392・393]。
- 44) 九龍浦の総鎮守であった九龍浦神社の氏子町は「栄町」「本町」「仲町」「幸町」「港町」「昭和町」等であった(「九龍浦神社御造営 委員会で満場一致決定」『釜山日報』1941年4月9日、夕刊4面)。参考までに、1932年の九龍浦の秋祭りは、当番仲町で10月14日午後4時の「前夜祭」から始まり、その後の「奉獻余興」、15日朝の「例祭」後、午前10時から神輿渡御(市中を練った後、海に入る「神幸」、同日午後6時「還幸祭」で終わった。出し物は、「旭町稚児の花笠行列」「栄町踊屋台と仮装行列」「本町肥後の駒下駄と仮装行



- 列と（芸）妓囃屋台」「幸町爆弾三勇士と少年軍」「港町大獅子舞」「〇場町の悪〇掃花車と妓生郡屋台」、当番仲町は「芸妓総出の屋台」であった（「九龍浦秋祭」『釜山日報』1932年10月21日、朝刊3面、括弧は筆者、〇は不明）。
- 45) 下線は、日本語の誤訳（「借地料を要求せずに」）を筆者が修正した部分である。
- 46) 裏表紙に掲載された文章は、本文中の語りを若干編集したものである。なお、裏表紙にはソ・サンホの語りと共に萱野が語った言葉も載せられている。
- 47) 以下、筆者が直接インタビューした3名の日本人話者は匿名表記する。いずれの方も研究論文における実名表記を了承してくださった。しかし、筆者の判断で匿名にすることにした。なお、石原さんは、歴史館の展示や『韓国内の日本人村』において実名・生年・肩書が公開されているので、そのまま引用した。
- 48) 十河弥三郎は、九龍浦電気の理事や九龍浦油肥製造会社の代表を務めつつ、2回に亘る九龍浦港防波堤築造・拡張工事を主導した、橋本善吉に並ぶ九龍浦の有力者であった。現在九龍浦公園（九龍浦神社の跡地）には1944年に建てられた十河弥三郎の頌徳碑〔十河編1978: 21〕が残っている。
- 49) B氏とC氏は、浦項市の招待を受け、東京都内で開催された『韓国内の日本人村』の出版記念会（2009年6月4日）や市主催の「九龍浦訪問の旅」（2009年10月13～15日）に参加した。その際、B氏は浦項市の「観光親善大使」に任命された。
- 50) 「両班（ヤンバン）」は、朝鮮王朝時代（1392～1910）における支配特権階層の名称である。
- 51) ただ、A氏の家に石が投げられた「暴動」がいつ起ったのか、つまり、終戦が決まった当日なのか、それとも数日経ってからなのかは定かでない。
- 52) 『九龍浦元居住者名簿（昭和55年12月現在）』にも同じ「九龍浦小史」が掲載されているが、同箇所は「大正9年に朝鮮独立万才騒ぎがあり」〔十河編1980: 21〕に縮約・省略されている。なお、韓国で「3・1独立運動」と称される朝鮮の独立万歳運動は1919年3月1日を期して始められ、その年の数ヶ月間行われた。大正9年は大正8年の間違いである可能性が高い。
- 53) そのメモ用紙は「【韓国内の日本人村】記事の間違<sup>マ</sup>って<sup>マ</sup>る箇所」と題され、「十河弥三郎は日本に引き揚げて下関で昭和31年4月9日に83歳で死去」「十河薫は十河弥三郎の次男である」等、全部で7か所の間違いが書き記されていた。
- 54) 碑文がセメントで塗りつぶされた頌徳碑については、拙論〔2017〕を参照されたい。
- 55) ノスタルジアの対象として「子供時代」（childhood）は欠かせない〔Lowenthal 2015: 33～41〕。

- 56) 『九龍浦元居住者名簿(昭和55年12月現在)』に書いてある「昭和55年12月十河薫68才」[十河編1980:22]から推測した。
- 57) 終戦直後の九龍浦の日本人戸数は定かでない。『迎日郡史』[迎日郡史編纂委員会編1990:640~647]によると、1942年滄洲面には231戸の日本人が住んでいた。この数字から、滄洲面事務所の置かれた九龍浦の日本人戸数を推測した。

## 参考文献

### (日本語)

- 金賢貞 2012 「『近代文化都市』<sup>ゲンサン</sup> 韓国群山市の負の遺産とまちづくり：植民地時代の建築物の記憶と評価をめぐる1990年代末以降の変化に注目して」『日本民俗学』269、35~66頁。
- 2017 「現代韓国における植民地遺産と近代観光：『九龍浦近代文化歴史通り』を事例に」『日本民俗学』292、29~60頁。
- 2018 「韓国の文化財行政と『近代』：『登録文化財制度』の新設を中心に」亜細亜大学国際関係研究所『国際関係紀要』28-1、1~42頁。
- 志度町史編さん委員会編1986『新編志度町史 上巻』。
- タウシェク、マルクス 2018 「文化遺産—過去というものの現在化に対する文化人類学的視点」『日本民俗学』295、108~132頁。
- 趙重義・権善熙 2009 『韓国内の日本人村：浦項九龍浦で暮らした』中嶋一訳、図書出版アルコ。
- 2010 『(改訂版) 韓国内の日本人村：浦項九龍浦で暮らした』中嶋一訳、図書出版アルコ。
- 町誌編集委員会編1979『西海町誌』西海町。
- 十河薫編1978『九龍浦元居住者名簿(昭和53年2月現在)』。
- 1980『九龍浦元居住者名簿(昭和55年12月現在)』。
- 1988『九龍浦会員名簿(昭和63年3月現在)』。
- 朴重信・金泰永・布野修司 2005 「韓国・九龍浦の日本人移住漁村の居住空間構成とその変容」『日本建築学会計画系論文集』595、95~100。

### (韓国語・英語)

- 차은정 2014 『재조귀환자의 “후루사토” (故郷) 와 기억의 정치학: 패전 후 귀국 일본인에 대한 민족지적 연구』(서울대학교 인류학과 박사학위논문)。
- 조중의・권선희 2009 『구룡포에 살았다: 일본 세토내해(瀬戸内海) 어부들의 구룡포 역정』 도서출판 아르코。
- 2010 『(개정판) 구룡포에 살았다: 일본 세토내해(瀬戸内海) 어부들의 구룡

- 포 역정』 도서출판 아르코.
- 清州大学校建築工學部留齋建築研究室編 2003 『研究報告 X 近代都市住宅実測調査報告書 (九龍浦邑)』.
- 홍금수 2013 「구룡포 신사터의 탈식민 혼성경관 텍스트에 내재된 다중의미」 『문화역사지리』 25-3, pp. 34~63.
- Kim, Hyeon-Jeong. 2014. "Making Korean Modern Museums: Japanese Colonial Buildings as Heritage and Resource." *ACTA KOREANA*, 17 (2): 583~607.
- 권숙인 2008 「식민지 조선의 일본인 : 피식민 조선인과의 만남과 식민의식의 형성」 한국사회학회 『사회와 역사』 80, pp. 109~139.
- 이창언 2010 「식민지시기 구룡포지역의 일본인 사회」 『민속학연구』 27, pp. 91~115.
- 李勛相 2001 「미시사와 多聲性の 글쓰기 : 지역사, 향리집단, 그리고 이들을 둘러싼 복수의 시각들」 국사편찬위원회 편 『韓國史論』 32, pp. 69~103.
- Lowenthal, David. 2015. *The Past is a Foreign Country - Revisited*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 文化体育觀光部 2017 『2017 전국 문화기반시설 총람』 문화체육관광부 문화기반과.
- 文化財庁 2008 『근대문화유산 지키는 당신 당신이 정말 자랑스럽습니다』.
- 文化財庁近代文化財分科 2007 『문화재위원회 회의록 2007 [하 3-2 권] 매장문화재분과 · 근대문화재분과』.
- 2008 『문화재위원회 회의록 2008 [하 2-1 권] 매장문화재 · 근대문화재분과』.
- 2009 『문화재위원회 회의록 2009 [하 2-1 권] 매장문화재분과 · 근대문화재분과』.
- 2013 『2013년도 문화재위원회 (근대문화재분과) 제 5 차 회의록』.
- 文化觀光部 2007 『동해안권 광역관광개발계획 : 동계 (東界) 의 꿈, 변 (邊) 에 서 추 (樞) 로』.
- 浦項市 2009 『시정백서 2007~2008』.
- 2010 『열린포항 2010.3』.
- 呂博東 2001 「근대 가가와현 (香川県) 어민의 조선해어업관계」 『日本學報』 47, pp. 519~533.
- Smith, Laurajane. 2006. *Uses of Heritage*. Oxon: Routledge.
- 迎日郡史編纂委員會編 1990 『迎日郡史』 영일군사편찬위원회.